2U−2(P)　　71，72歳高齢者の咀嚼能力と生活機能の関係

ノートルダム清心女大人間生活　○宮田義昭　岡　寿美代　田野敬子

［目的］咀嚼能力の維持は生活機能の維持に関連があると考えられるが，高齢者では加齢につれて現在歯は減少し，咀嚼能力も生活機能も低下することがこれまでのわれわれの調査から認められている。今回は咀嚼能力と生活機能の関連性をより明らかにするために対象者の年齢幅を限定して調査した。

［方法］岡山市内の旧制中，旧制高女（現高校）の同窓会名簿から71，72歳に相当する卒業年度の市内自宅在住者（男74名，女31名　計105名）を対象者とした。また，われわれの既報の調査のうちから71，72歳の者（男6名，女18名　計24名）の結果も一部これに加えて検討した。調査内容のうち歯の現状，生活機能（老研式活動能力指標を使用）は面接調査により，咀嚼能力はチューインガム法（溶出糖量）により評価した。

［結果］調査対象者 105名の歯の現状は，現在歯のみの者14.3%，局部義歯の者 69.5%，総義歯の者16.2%であった。平均現在歯数は15.1±10.3歯（平成 5年歯科疾患実態調査報告では同年令で10.9歯）で，平均溶出糖量は 0.77±0.29g（n =103）であった。現在歯数が多い者ほど咀嚼能力は高かった。機能歯として20歯以上有する者でも残存現在歯数が多い者ほど咀嚼能力は高くなる傾向を示した。平均生活活動能力得点（13点満点）は12.1±1.8点で，咀嚼能力が高い群ほど生活機能が高い傾向が認められた（r =0.63）。また，過去に本研究室で調査した施設生活者の結果も加えて検討しても同様の結果が認められた（r =0.71）。施設生活者の咀嚼能力（0.63±0.36g）も生活活動能力得点（9.0±3.5点）も自宅生活者のそれらと比較すると明らかに低かった。